

岩手県盛岡市方言における動詞の 否定・使役・受身形バリエーションと その通時的性質

齋藤孝滋

キーワード C語幹動詞化 V語幹動詞化 類推 助動詞 来る 射る

1. 目的

本研究の第1の目的は、北奥方言の太平洋側内陸部に位置する岩手県盛岡市⁽¹⁾方言について、動詞の使役形、受身形、否定形のバリエーションを共時的に明らかにし、第2の目的は、それらの中で特に動詞活用変遷史上特徴的であるV語幹動詞「射る」、強変化動詞「来る」バリエーションが有する通時的性質について明らかにすることにある。

既に、齋藤(2003b)で、本稿で用いる資料の一部を用いて、盛岡市方言の動詞否定・使役・受身形についての音声文法的考察を行っているが、バリエーションの総合的な共時的分析と、通時的性質の分析は未だ行っていない。

informantは、齋藤(1987,2001b,2002b,2003a,b,2004)と同様に調査地生え抜きの岩持文江氏(1907年生)である。調査は、1985年3～4月、8～9月に、音韻・動詞・形容詞等の記述的研究の目的で、筆者が盛岡市内のご自宅に訪問して実施したが、本稿で用いる資料はその一部である。

調査方法は、「当該地域出身の親しい友人(同性)とくつろいで話す場面」を設定した上で、共通語の例文を示して対応する方言パターンを発話して頂き、さらにそれにより見出された接続形式を用いて活用表現を発話して頂くかたちで行った。発話は、すべてカセットテープに録音し、後で確認した。

2. 動詞の種類

盛岡市方言の動詞は、不変化部(語幹)の末尾が子音音素⁽²⁾であるもの(I類:C語幹動詞)と、母音音素であるもの(II類:V語幹動詞)、両者が共存し混合してあらわれるもの(III類:C語幹V語幹混合動詞「射る」)、3種の語幹が交替するもの(IV類:

強変化動詞「来る」に分けることができ、I類、II類の動詞は、その末尾音素によって、さらに細分類される。盛岡市方言の動詞の分類を示すと次のようになる。

- | | | |
|-----------|---|---------------------------------------|
| I類：C語幹動詞 | } | <1a> g1 /kigu/ (聞く) |
| | | <2b> g2 /egu/ (行く) |
| | | <3> o /kogu/ (漕ぐ) |
| | | <4> z /tazu/ (立つ) |
| | | <5> s /su/ (する) /korusu/ (殺す) |
| | | <6> r /toru/ (取る) |
| | | <7> n /sunu/ (死ぬ) |
| | | <8> m /jomu/ (読む) |
| | | <9> ~b /to~bu/ (飛ぶ) |
| | | <10> w /'omo'u/ (思う) ⁽³⁾ |
| | | <11> k /kuu/ (食う) |
| II類：V語幹動詞 | } | <1> i /niru/ (似る) |
| | | <2> u /ozuru/ (落ちる) |
| | | <3> e /nagareru/ (流れる) ⁽⁴⁾ |
| | | <4> ε /kaN ₀ εru/ (考える) |

III類：C語幹・V語幹混合動詞 r~e /eru/ (射る)

IV類：強変化動詞 ku~ki~ko /kuru/ (来る)

盛岡市方言においては、共通語及び多くの方言で強変化動詞である*/suru/(する)が、完全にI類：C語幹動詞化している(橘1932、齋藤2001b)。従って、終止・連体・準体・禁止・推量志向表現とも、動詞部分は/su/となっている。

また、V語幹動詞の種類は、末尾母音が、共通語の場合は/i/、/e/の2種類であるが、盛岡市方言の場合は、拍の統合(*/zi/>/zu/)により/u/、連母音融合(/a'e/>/ε ε/)により/ε/が生じたため⁽⁵⁾、共通語より2種類多い4種類となっている。

3. 活用

3・1 使役形

使役形は、使役の助動詞/seru/raseru/が接続する場合の活用形である。

なお、他に/saseru/が現れることがあるが、/eru/ (射る) の場合のみ/raseru/と併用するかたちで現れる。

(1) C語幹動詞一般

kigaseru	'egaseru	koḡaseru	tadaseru
[k ^h i gas ɛ r ɪ̄]	[ɪg as ɛ r ɪ̄]	[koḡas ɛ r ɪ̄]	[tadas ɛ r ɪ̄]
(聞かせる)	(行かせる)	(漕がせる)	(立たせる)
saseru	korosaseru	toraseru	sunaseru
[sas ɛ r ɪ̄]	[ko r osas ɛ r ɪ̄]	[to ras ɛ r ɪ̄]	[sũnas ɛ r ɪ̄]
(させる)	(殺させる)	(取らせる)	(死なせる)
'jomaseru	toḡaseru	'omo 'waseru	
[jomas ɛ r ɪ̄]	[to ^m bas ɛ r ɪ̄]	[omowas ɛ r ɪ̄]	
(読ませる)	(飛ばせる)	(思わせる)	

(2) C語幹動詞/kuu/ (食べる<食う>)

ku'wa seru	~	ka seru
[kũwas ɛ r ɪ̄]	~	[kas ɛ r ɪ̄]
(食べさせる<食セル>)		

(3) V語幹動詞

miraseru	'ozuraseru	'eraseru	noseraseru	kaNḡεeraseru
[m i ras ɛ r ɪ̄]	[o ^d zũr as ɛ r ɪ̄]	[ɪ ras ɛ r ɪ̄]	[nos ɛ r as ɛ r ɪ̄]	[kaḡε r as ɛ r ɪ̄]
(見させる)	(落ちさせる)	(居させる)	(載せさせる)	(考えさせる)

(4) V語幹・C語幹併用動詞/eru/ (射る)

'eraseru	~	'esaseru
[ɪ ras ɛ r ɪ̄]		[Isas ɛ r ɪ̄]
(射させる)		

(5) 強変化動詞/kuru/ (来る)

kuraseru	~	kiraseru	~	koraseru
[kũr as ɛ r ɪ̄]		[k ^h i ras ɛ r ɪ̄]		[ko ras ɛ r ɪ̄]
(来させる)				

3・2 受身形

受身形は、使役の助動詞/ereru/rareru/が接続する場合の活用形である。

(6) C語幹動詞一般

kigareru	'egareru	koḡareru	tadareru
[k ^h i g a r ɛ r ɪ̄]	[ɪ g a r ɛ r ɪ̄]	[koḡ a r ɛ r ɪ̄]	[tada r ɛ r ɪ̄]
(聞かれる)	(行かれる)	(漕がれる)	(立たれる)

sareru	korosareru	torareru	sunareru
[sa r ɛ r ɪ̃]	[ko rosa r ɛ r ɪ̃]	[to ra r ɛ r ɪ̃]	[sũna r ɛ r ɪ̃]
(される)	(殺される)	(取られる)	(死なれる)
'jomareru	to ^h bareru	'omo 'wareru	
[joma r ɛ r ɪ̃]	[to ^m ba r ɛ r ɪ̃]	[omowa r ɛ r ɪ̃]	
(読まれる)	(飛ばれる)	(思われる)	

(7) C語幹動詞/kuu/ (食べる<食う>)

ku'wareru	~	kareru
[kũwa r ɛ r ɪ̃]	~	[ka r ɛ r ɪ̃]
(食べられる<食レル>)		

(8) V語幹動詞

mirareru	'ozuraseru	'erareru	noserareru	kaN ₀ ɛ ɛ rareru
[mĩ ra r ɛ r ɪ̃]	[o ^d zũra r ɛ r ɪ̃]	[I ra r ɛ r ɪ̃]	[nos ɛ ra r ɛ r ɪ̃]	[ka ^o ɛ ra r ɛ r ɪ̃]
(見られる)	(落ちられる)	(居られる)	(載せられ)	(考えられる)

(9) V語幹・C語幹併用動詞'eru/ (射る)

'erareru
[I ra r ɛ r ɪ̃]
(射られる)

(10) 強変化動詞/kuru/ (来る)

kurareru	~	kirareru	~	korareru
[kũra r ɛ r ɪ̃]		[k i ra r ɛ r ɪ̃]		[ko ra r ɛ r ɪ̃]
(来られる)				

3・3 否定形

否定形は、否定の助動詞/nεε/が接続する場合の活用形である。

(1) C語幹動詞一般

kiganεε	'eganεε	ko _o ganεε	tadanεε
[k ^o i g anε']	[I g anε']	[ko _o ganε']	[tadanε']
(聞かない)	(行かない)	(漕がない)	(立たない)
saneε	korosaneε	toraneε	sunaneε
[sane']	[ko rosa ne']	[to ranε']	[sũnanε']
(しない)	(殺さない)	(取らない)	(死なない)

'jomanεε tob̃anεε 'omo 'wanεε
 [jomanε'] [to^mbane'] [omowane']
 (読まない) (飛ばない) (思わない)

(12) C語幹動詞/kuu/ (食べる<食う>)

ku'wanεε ~ kanεε
 [kiiwane'] ~ [kanε']
 (食べない<食ワナイ>)

(13) V語幹動詞

mineε	'enεε	nosenεε	kaNŋεεnεε
[mine']	[Inε']	[nas ε ne']	[kaŋε'ne']
(見ない)	(居ない)	(載せる)	(考えない)

mineε	'ozunεε	'enεε	nosenεε	kaNŋεεnεε
[mi ne']	[o ^d ziine']	[Inε']	[nos ε ne']	[kaŋε'ne']
(見ない)	(落ちない)	(居ない)	(載せる)	(考えない)

(14) V語幹・C語幹併用動詞/eru/ (射る)

'eranεε
 [I rane']
 (射ない)

(15) 強変化動詞/kuru/ (来る)

koneε
 [kone']
 (来ない)

4. 接続形式の特徴

使役形は、/seru/ /raseru/受身形は/eru/ /rareru/否定形は/nεε/が接続する形式であったが、ここでは、共通語と異なる使役形接続形式/raseru/について、その性質を検討する。

4・1 使役形接続形式/seru/、/raseru/

まず、中央語における、C語幹動詞「取る」と、V語幹動詞「見る」における使役形について、形態論的に「語幹－活用語尾－助動詞」の形式で示すと(16)(17)のようになる。

- (16) C語幹動詞/toraseru/=tor-a-seru
 (17) V語幹動詞/misaseru/=mi-φ-saseru

次に、盛岡市方言におけるC語幹動詞と、V語幹動詞における使役形について、同様

の形式で示すと(18)(19)のようになる。

(18) C語幹動詞/toraseru/=tor-a-seru

(19) V語幹動詞/miraseru/=mi-φ-raseru

小林(2002)は、日本語動詞活用の変遷に関わる考察で、全国方言のバリエーションの検討をとおして、現存する全活用が語幹/t/であるC語幹動詞に統合する方向性を見出している。この方向性の視点からすると、盛岡市方言のV語幹動詞に接続する/raseru/は、V語幹動詞がC語幹動詞(語幹末尾が/t/である/toru/と同種の動詞)化する兆しを示す形式であるといえることができるのである。使役形接続形式/raseru/をめぐる、V語幹動詞のC語幹動詞化のメカニズム(「語幹-活用語尾-助動詞」の構造類推)を、V語幹動詞/miru/(見る)とC語幹動詞/toru/との類推比例式で示すと(20)のようになる。

(20) /toraseru/ : tor-a-seru = /miraseru/ : x

$$x = \text{mir-a-seru}$$

4・2 受身形接続形式/reru/、/rareru/

受身形接続形式/reru/、/rareru/は、中央語・盛岡市方言共に同様であり、C語幹動詞「取る」と、V語幹動詞における受身形「見る」について、形態論的に「語幹-活用語尾-助動詞」の形式で示すと(21)(22)のようになる。

(21) C語幹動詞/torareru/=tor-a-reru

(22) V語幹動詞/mirareru/=mi-φ-rareru

V語幹動詞に接続する/rareru/は、先に述べた使役形接続形式/raseru/と同様に、V語幹動詞をC語幹動詞(語幹末尾が/t/である/toru/と同種の動詞)として類推することを可能とする形式であるといえるのである。使役形接続形式/rareru/をめぐる、V語幹動詞のC語幹動詞化のメカニズム(「語幹-活用語尾-助動詞」の構造類推)を、V語幹動詞/miru/(見る)とC語幹動詞/toru/との類推比例式で示すと(23)のようになる。

(23) /torareru/ : tor-a-reru = /mirareru/ : x

$$x = \text{mir-a-reru}$$

4・3 否定形接続形式/nεε/

否定形接続形式/nεε/の用法は、中央語の/na'i/と同様であり、C語幹動詞と、V語幹動詞における否定形について、形態論的に「語幹-活用語尾-助動詞」の形式で示すと(24)(25)のようになる。

(24) C語幹動詞/toranεε/=tor-a-nεε

(25) V語幹動詞/minεε/=mi-φ-nεε

V語幹動詞に接続する/nεε/は、先に述べた使役形接続形式/raseru/や受身形接続形式

/rareru/とは異なり、それ自体で、V語幹動詞をC語幹動詞（語幹末尾が/r/である/toru/と同種の動詞）として類推することを可能とする形式ではない。

5. /eru/（射る）の使役形・受身形・否定形の特徴

5・1 使役形

/eru/の使役形のバリエーションは、/esaseru/、/eraseru/の2種類である。

本稿におけるinformantにおいては、使用頻度は両者とも同程度であり、用法・ニュアンス等の違いはとくにみられないとのことであった。

両者は、中央語と同形である/saseru/をとまなう形式のほうが、その成立において、より古いバリエーションであると推定できる。即ち㉔のような変化が推定できるのである。

㉔ /esaseru/ > /eraseru/

なお、先に㉔でみたように、盛岡市方言のV語幹動詞に接続する/raseru/は、V語幹動詞がC語幹動詞（語幹末尾が/r/である/toru/と同種の動詞）化する兆しを示す形式であった。それに対し㉔のように共通語と同形の/saseru/は、その兆しはまったく示しえない形式である。従って、/esaseru/はV語幹動詞的バリエーション、/eraseru/はC語幹動詞的バリエーションであるとみとめることができる。

以上より、/eru/は、使役形において、本来のV語幹動詞的バリエーションと新しく成立したC語幹動詞的バリエーションが、同等の価値で並存している段階にあるといえるのである。

5・2 受身形

/eru/の受身形のバリエーションは、/erareru/ 1種類である。

V語幹動詞に接続する/rareru/は、先に述べたように、V語幹動詞をC語幹動詞（語幹末尾が/r/である/toru/と同種の動詞）として類推することを可能とする形式であった。従って、/erareru/は、受身形のみからでは判断が困難であるが、ヴォイスのカテゴリーという点で同様の使役形の状況から、C語幹動詞的バリエーションとみとめられようか。

5・3 否定形

/eru/の否定形のバリエーションは、/eraneε/ 1種類である。

/eraneε/は、明らかにC語幹動詞的変種である。

即ち、/eru/は、否定形において、完全にC語幹動詞化しているといえるのである。

5・4 /eru/使役形・受身形・否定形バリエーションの変化の方向性による性質

以上の考察を踏まえ、/eru/の使役形・受身形・否定形バリエーションの性質をまとめると㉔㉕のとおりである。

なお、「助動詞の性質」については、受身形バリエーションの場合、中央語と同様であるため、そのみでは変化の方向性による性質が判断しがたいが、㉞のような、同じくヴォイスのカテゴリーに属する使役形と同様の構造変化が生じたものととらえ、「？」付の形で示すこととした。また、否定形バリエーションの場合は、助動詞自体に変化の方向性はまったく見出せないことから、「—」で示した。

㉞ 使役形バリエーションの性質

	語幹の性質	助動詞の性質	使役形バリエーションの性質
'esaseru {'e- φ -saseru}	V 語幹動詞的	V 語幹動詞的	V 語幹動詞的変種
('eraseru {'e- φ -raseru}	V 語幹動詞的	V 語幹動詞的	V 語幹動詞的変種)
'eraseru {'er-a-seru}	C 語幹動詞的	C 語幹動詞的	C 語幹動詞的変種

㉞ 受身形バリエーションの性質

	語幹の性質	助動詞の性質	使役形バリエーションの性質
'erareru {'er-a-reru}	C 語幹動詞的	C 語幹動詞的?	C 語幹動詞的変種

㉞ 否定形バリエーションの性質

	語幹の性質	助動詞の性質	使役形バリエーションの性質
'erane	C 語幹動詞的	—	C 語幹動詞的変種

6. /kuru/ (来る) の使役形・受身形・否定形の特徴

6・1 使役形・受身形

/kuru/の使役形のバリエーションは、/kuraseru/ /kiraseru/ /koraseru/の3種類である。また、受身形のバリエーションも、/kurareru/ /kirareru/ /korareru/の3種類である。すなわち、/kuru/は、使役形・受身形ともに、3種類の語幹バリエーション/ki/、/ku/、/ko/が併存するわけである。

6・1・1 使役形/koraseru/、受身形/korareru/について

/koraseru/ /korareru/は、中央語と同様である否定形本来の語幹/ko/を保持している点で、その成立において、3種類の中で最も古いバリエーションであると推定できる。なお、使役形バリエーション/koraseru/の成立には、㉞のような変化が推定される。受身形バリエーションについては、少なくとも音韻上の変化はみとめられない。

㉞ */kosaseru/ > /koraseru/

6・1・2 /kiraseru/、/kirareru/について

/kiraseru/ /kirareru/は、中央語と異なる使役形語幹/ki/を持っている点で、その成立において、前述の/koraseru/、/kirareru/より、変化の進んだバリエーションであると推定でき

る。

即ち、㊸㊹のような変化が推定されるのである。

㊸) */kosaseru/>/kiraseru/

㊹) /korareru/>/kirareru/

次に、この変化のレベルについて検討する。

齋藤 (2001) によれば、盛岡市方言では、/o/>/i/の音韻対応は一般的にみられない。従って、㊸㊹の変化は、音韻的变化とは認めがたく、形態的变化と推定されることになる。

まず、/kiraseru/kirareru/について、他の活用形との語幹統一の視点、さらに、活用による動詞の種類視点で考察する。

齋藤 (2001) によれば、当informantの/kuru/連用形は、/kiteε/ (来たい) である。即ち、/kiraseru/kirareru/は連用形との間で語幹の統一がなされたバリエーションといえることができるのである。

次に、活用による動詞の種類視点で考察する。

V語幹動詞の種類は、末尾母音が/i/、/e/及び拍統合/zi/>/zu/により生じた/u/、連母音融合(/a'e/>/εε/)により生じた/ε/の4種類であった。/kuru/の場合は、拍統合も、連母音融合も関わらないことから、語幹が/ki/または/ke/ならばV語幹動詞であると判断できる。従って、語幹が/ki/である/kiraseru/は、V語幹的バリエーションと認めることができるのである。

以上より、/kiraseru/kirareru/は、本来の語幹/ko/が連用形語幹/ki/に統合した結果生じた、V語幹動詞化の方向性を示す変種であるといえるのである。

以上の/kuru/使役形・受身形語幹の「連用形語幹/ki/化=V語幹動詞化」のメカニズムを、統合志向方向先のV語幹動詞/miru/を対照例として、「連用形：使役形」及び「連用形：受身形」の語幹統一の類推比例式で示すと、㊸㊹のようになる。

㊸) 使役形におけるV語幹動詞化の類推比例式

$$/mitεε/:/miraseru/ = /kiteε/: x$$

$$x = /kiraseru/$$

㊹) 受身形におけるV語幹動詞化の類推比例式

$$/mitεε/:/mirareru/ = /kiteε/: x$$

$$x = /kirareru/$$

6・1・3 /kuraseru/, /kurareru/について

/kuraseru/kurareru/は、中央語と異なる形語幹/ku/を持っている点で、その成立におい

て、前述の/koraseru/korareru/より、変化の進んだバリエーションであると推定できる。

/kuraseru/kurareru/について、まず、他の活用形との語幹統一の視点で考察する。

/kuraseru/kurareru/は、終止形・連体形・準体形・禁止形（齋藤2003a）との間で語幹の統一がなされたバリエーションとすることができる。

次に、活用による動詞の種類の種類で考察する。

/kuraseru/kurareru/は、先に述べたようにV語幹動詞的バリエーションではありえない。従って、動詞の種類としての統合傾向は、C語幹動詞化の方向性にあると推定できる。

以上の/kuru/使役形語幹及び受身形語幹の終止形化のメカニズムを、C語幹動詞/toru/との「終止形：使役形」及び「終止形：受身形」の類推比例式で示すと、㉞㉞のようになる。

㉞ /toru:/toraseru/ = /kuru:/x

x = /kuraseru/

㉞ /toru:/torareru/ = /kuru:/x

x = /kurareru/

さらに/kuraseru/kurareru/について、C語幹動詞化に際して想定される語幹・活用語尾・助動詞の分析比例式を、同様に/toru/との関連で「語幹－活用語尾－助動詞」の形式で示すと㉞㉞のようになる。

㉞ /toraseru/ : tor-a-seru = /kuraseru/ : kur-a-seru

㉞ /torareru/ : tor-a-reru = /kurareru/ : kur-a-reru

6・2 否定形

/kuru/の否定形バリエーションは、/koneε/ 1種類である。

/koneε/は、中央語と同様に強変化動詞的変種である。

6・3 /kuru/使役形・受身形・使役形バリエーションの変化の方向性による性質

以上の考察を踏まえ、使役形・受身形・否定形のバリエーションの性質をまとめると㉞(41)のとおりである。

なお、受身形バリエーションの「助動詞の性質」については、中央語と同様であるため、そのみでは変化の方向性による性質が判断しがたいが、㉞のような、同じくヴォイスのカテゴリーに属する使役形と同様の構造変化が生じたものととらえ、?付の形で示すこととした。また、否定形バリエーションの場合は、助動詞自体に変化の方向性はまったく見出せないことから、「-」で示した。

㉓ 使役形バリエーションの性質

	語幹の性質	助動詞の性質	使役形バリエーションの性質
koraseru	強変化動詞的	C語幹化	C語幹傾向強変化動詞的変種
kiraseru	V語幹動詞的	C語幹化	V語幹動詞・C語幹化助動詞混合的変種
kuraseru	C語幹動詞的	C語幹化	C語幹動詞的変種

㉔ 受身形バリエーションの性質

	語幹の性質	助動詞の性質	受身形バリエーションの性質
korareru	強変化動詞的	C語幹化?	C語幹傾向?強変化動詞的変種
kiraseru	V語幹動詞的	C語幹化?	V語幹動詞・C語幹化助動詞混合的変種
kuraseru	C語幹動詞的	C語幹化?	C語幹動詞的変種

㉕ 否定形バリエーションの性質

	語幹の性質	助動詞の性質	否定形バリエーションの性質
konee	強変化動詞的	—	強変化動詞的変種

7. まとめ

本研究における知見をまとめると以下のとおりである。

- (1) 使役形接続形式/raseru/ (させる>ラセル) は、V語幹動詞をC語幹動詞として類推することを可能にする形式である。受身形接続形式/rareru/ (られる) も同様の性質を持つ形式と考えられる。
- (2) 否定形接続形式/nee/ (ない) は、それ自体でV語幹動詞をC語幹動詞として類推することを可能とする形式ではない。
- (3) /eru/ (射る) は、使役形において、V語幹動詞的変種とC語幹動詞的変種が併用され、受身形・否定形においては、C語幹動詞的変種のみが使用される。
- (4) /kuru/ (来る) は、使役形・受身形においては、C語幹傾向強変化動詞的変種、V語幹動詞・C語幹化助動詞混合的変種、C語幹動詞的変種が併用されるが、否定形においては、強変化動詞的変種のみが使用される。

特に(4)/kuru/の使役形・受身形において、同一個人内で、C語幹動詞とV語幹動詞という変化の方向性が異なる変種が併用されていることは、注目に値しよう。これは、即ち、少数派である強変化動詞が、多数派であるC語幹動詞又はV語幹動詞に統合しようとする際、最初からいずれか一方を志向し一律に変化するのではなく、可能性のある複数の方向性を志向する段階を経て、徐々に一方へ向かって変化してゆくことを示唆するものといえるのである。

注

- (1) 盛岡市は、藩政時代から現在に至るまで岩手地域の政治・文化の中心である。
- (2) 子音の音素認定については、斎藤 (1987,1990,1991a,b,1992a) を参照されたい。なお、他方言において同様の音素認定を行ったものとして井上 (1968,1980,1984)、上野 (1973) 等がある。
- (3) 盛岡市方言の本研究におけるinformantには、既に齋藤 (2003a) で述べたように他の岩手方言にしばしばみとめられる「語中/w/の脱落」(斎藤1997) はみられない傾向にある。
- (4) 盛岡市方言の本研究におけるinformantには、他の岩手方言にしばしばみとめられる「/r/行拍連続回避」(斎藤2002c) は、みられない傾向にある。
- (5) 盛岡市方言及びその周辺地域方言におけるこれらの現象について述べたものとして上野 (1973)、上野他 (1989)、加藤 (1969)、小松代 (1976)、斎藤 (1991a,2001b,2002b,2003a,b,2004)、柴田 (1962)、平山編 (1982)、平山他編 (1992)、森下 (1982,1983)、本堂 (1979,1982) 等がある。なお、連母音融合 (a'e/>/eε/について、上野 (1973) は盛岡市近隣の雫石町方言を対象として異なる音韻解釈を示している。

文献

- 井上史雄 1968 「東北方言の子音体系」『言語研究』53 (井上史雄、篠崎晃一、小林隆、大西拓一郎編 1994 『日本列島方言叢書2 東北方言考① (東北一般・青森県)』ゆまに書房、及び井上2000に再録)
- 同 1980 「言語構造の変遷」『講座言語第1巻 言語の構造』大修館書店 (井上2000に再録)
- 同 1984 「音韻研究法」『講座方言学2 方言研究法』国書刊行会
- 同 2000 『東北方言の変遷』秋山書店
- 上野善道 1973 「岩手方言雫石町方言の音韻体系」『日本方言研究会第17回発表原稿集』(井上史雄、篠崎晃一、小林隆、大西拓一郎編1994 『日本列島方言叢書3 東北方言考② (岩手県・宮城県・福島県)』ゆまに書房に再録)
- 上野善道・相沢正夫・加藤和夫・沢木幹栄 1989 「日本方言音韻総覧」『日本方言大辞典下巻』小学館
- 加藤正信 1969 「東北方言概説」『言語生活』210 (井上史雄、篠崎晃一、小林隆、大西拓一郎編1994 『日本列島方言叢書2 東北方言考① (東北一般・青森県)』ゆまに書房に再録)
- 小林隆 2002 「日本語方言の歴史」北原保雄監修、江端義夫編『朝倉日本語講座 第10巻方言』朝倉書店
- 小松代融一 1976 『岩手方言の音韻と語法』岩手方言研究会
- 齋藤孝滋 1987 「岩手方言における子音の語中有声化現象の音韻論的解釈について—岩手方言を中心に—」『語文論叢』15
- 同 1990 「岩手方言における語中子音有声化現象—音環境・語彙的事情・世代の観点から—」『国語学研究』30
- 同 1991a 「音韻」(加藤正信・村上雅孝・神戸和昭・齋藤孝滋・武田拓・半沢康、1991、「南部・伊達藩境地帯における方言分布の報告と考察」『日本文化研究所研究報告』別巻28号)
- 同 1991b 「岩手方言における語中子音鼻音化現象—音環境・語彙的事情・世代の観点から—」『語文論叢』19
- 同 1992a 「岩手方言における語中子音有声化現象・鼻音化現象—言語内の・外的要因の観点から—」『国語学』168

- 同 1992b 「母音無声化の「広さ」と「強さ」—岩手方言を中心に—」『国語学研究』31
- 同 1994 「特殊アクセント方言における音調パラエティーと認知の原理—岩手県一関市舞川方言の名詞を対象として—」『音声の研究』23
- 同 1997、「岩手方言における語中/w/の動態要因とバリエーションの計量的予測」『国語学研究』36
- 同 2000、「岩手県方言における母音無声化の変容」『国語学会平成12年度春季大会要旨集』
- 同 2001a、「計量日本語学の入門書」『日本語学 4月臨時増刊号日本語の計量研究法』
- 同 2001b、「日本のことばシリーズ3 岩手県のことば」(平山輝男他編) 明治書院
- 同 2002a、「音声研究の歴史」飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座3 発音』明治書院
- 同 2002b、「岩手県盛岡市方言の形容詞活用体系」佐藤喜代治編『国語論究9 現代の位相』明治書院
- 同 2002c、「東北・越後方言における/g/をめぐる音変化」『フェリス女学院大学文学部紀要』37
- 同 2002d、「日本方言の音韻」北原保雄監修、江端義夫編『朝倉日本語講座 第10巻 方言』朝倉書店
- 同 2003a、「岩手県盛岡市方言における動詞の所謂終止・連体・準体・禁止・推量志向形と音韻・音声規則」『国学院大学紀要』41
- 同 2003b、「岩手県盛岡市方言の動詞否定・使役・受身形における母音無声化規則・語中子音有声化規則の音声文法的考察」『玉藻』39
- 同 2004、「岩手県盛岡市における動詞条件形・命令形と母音無声化規則・語中子音有声化規則・連母音融合規則の音声文法的考察」『フェリス女学院大学文学部紀要』39
- 柴田武 1962 「音韻」『方言学概説』国語学会(柴田武・北村甫・金田一春彦1980『日本の言語学第2巻音韻』大修館書店に再録)
- 同 1988『方言論』平凡社
- 橘正一 1932 「盛岡弁の動詞と形容詞」『方言と土俗』3-1(井上史雄、篠崎晃一、小林隆、大西拓一郎編『日本列島方言叢書3 東北方言考②(岩手県・宮城県・福島県)』ゆまに書房に再録)
- 平山輝男 1957 『日本語音調の研究』明治書院
- 平山輝男編 1982『北奥方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社
- 平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫1992『現代日本語方言大辞典』明治書院
- 本堂寛 1979「岩手方言」平山輝男編『全国方言基礎語彙の研究序説』明治書院
- 同 1982「8 岩手県の方言」『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会
- 森下喜一 1982『岩手県の方言』教育出版
- 同 1983「北奥方言における音韻変化の特色について—特にシチジとスツツを中心に—」『岩手医科大学教養部研究年報』18
- [付記] 長時間にわたり調査にご協力下さり、本稿における資料を含め、多くの音声言語資料を提供して下さった岩持氏に篤く御礼申し上げます。本研究は、日本学術振興会平成12・13年度科学研究補助金奨励研究(A)「全国方言における主要音現象規則の計量的、構造的・社会的・地理言語学的研究」(課題番号12710229)による成果の一部である。
- フェリス女学院大学・大学院教授(さいとう・こうじ)